

コロナ禍における学会運営

紫藤 昌彦 Masahiko Shido
日本精神神経学会副理事長

長引く COVID-19 の感染拡大は当学会の運営にも多大な影響を及ぼしている。委員会や理事会は悉く web 会議に移行し、2020 年度の代議員総会や学術総会も web 開催となった。また、2021 年度の代議員総会は会場開催、web 開催、書面票決が併用され、理事・監事選挙は初めて郵送で行われた。未曾有のパンデミックに際し、会員諸氏には事業の延期、日程変更、中止など多大なご迷惑をおかけしているが、柔軟に対応していただき心より感謝申し上げる。

財政面ではコロナ以前は委員会・理事会の交通費として月に 300 万円程度が支出されていたが、その支出が不要になった。また、2020 年度は学術総会の会場費も不要になった。その代わりにシステム運用費用が増えたが、交通費や会場費に比べると少額である。学術総会には例年よりも多い 8,700 名を超える会員が参加した。双方向のコミュニケーションが図れる「ライブ配信」と、会期中の一定期間に何度でも視聴が可能な「オンデマンド配信」の二本立ての開催であったが、評判はおおむね良好であり、今後の学術総会の方向性を考える材料になったと思っている。

医学生・研修医・専攻医・専門医・指導医と続く精神科医のキャリアパスに当学会はさまざまにかかわっている。医学生や研修医に対しては、多くの優秀な人材を精神科にリクルートすることを目的にサマースクールを開催している。2020 年度は開催中止となったものの、2021 年度はオンラインで「コロナ禍の留学経験」「オンライン懇親会」など、この時代ならではのプログラムが計画された。専攻医の研修、専門医試験、専門医資格更新、指導医資格認定などは、専門医制度を有する基本領域学会の重要な課題である。2020 年度の専門医試験は延期を余儀なくされたが、2021 年 4 月には初の web 面接試験を全国 12 会場で実施することができた。

さて、著者の担当する生涯教育委員会では、専門医資格更新審査を行っている。委員会では毎年度末に数回、経歴症例レポートの委員会査読を行っているが、今回は初めて

web で行った。学会の専門医は 2021 年度の更新より日本専門医機構の専門医に移行するが、当学会では機構専門医の更新に必須の共通講習 3 科目も学会ホームページ上の e ラーニングで配信している。結果的にコロナ禍でも役立つ教材になったことは幸いであった。専門医の先生方から事務局に個別の相談が寄せられることは多いが、最近は専攻医の指導に携わることを理由として、一度喪失した専門医資格を復活させたいという相談がある。新制度の研修が始まり、臨床現場で精神科専門医の資格が必要になってきていることを感じる。

現在、研修医を終えた医師の 6% が精神科を専攻し、精神科専攻医は毎年 500 人ずつ増えているが、ここで新たな問題として浮上したのが、研修医と専攻医との間に立ちほだかるシーリング（募集定員の上限）である。当学会では専攻医に過剰な負担を強いる制度には反対し、当学会を含む精神科七者懇談会からは『2021 年度専攻医募集に関する緊急声明』を発売したが、その後も日本専門医機構からは専攻医募集や専門医の認定・更新にあたってさまざまな提案が出されている。頻回に出される複雑な提案に、専攻医のモチベーションが低下しないことを願うばかりである。ちなみに、2022 年度のシーリングは COVID-19 の影響で 2021 年度募集時のシーリング数を踏襲することになった。

最後に、第 117 回学術総会は開催延期となったものの、2021 年 9 月 19 日から 21 日まで国立京都国際会館において木下利彦会長のもと開催される予定である。現地開催と web 開催を併用したハイブリッド開催であるが、会期後にはオンデマンド配信が予定されているので、それぞれの事情に合わせて活用していただきたい。2021 年 8 月末現在、東京では緊急事態宣言中のオリンピック・パラリンピック開催となった。コロナ禍における学会運営は厳しさを増しているが、事務局も全力でリモート勤務をしているので、会員諸氏も温かい目で見守ってほしいと思う。